

認知症高齢者のグループホームに関する研究 その9

－千葉県グループホームを対象として－

日大生産工（院） ○石井 健太
日大生産工 川岸 梅和

1. はじめに

高齢者人口が増加するとともに問題となっているのが認知症高齢者の増加である。厚生労働省（平成24年）^{注1)}によると、高齢者人口の15%が認知症高齢者であり、認知症は薬での改善が見込まれないため様々なケア、介護システムや介護を行う場である。その中でも本研究はグループホーム（以下：GHと記述）に着目する。

本研究に関連する既発表論文¹⁾において、GH毎に比較・検討した結果、以下の6つに整理している。

- ① GHの分布は、現在人口が集中している地域であり、かつ今後高齢化が見込まれる地域に多い。
- ② 新築の周辺環境において、利便性に欠ける現状がみられる。
- ③集合住宅・寮等改修のGHでは、市街地近郊の住宅地において、他の地域より周辺環境の評価が高くなっている。
- ④住宅改修のGHにおいて地域とのコミュニケーションの評価が高い。
- ⑤新築のGHでは、地域とのコミュニケーションが消極的な状況である。
- ⑥地域住民が遊びに来ることやGHが地域住民と交わる機会を求めている。

上記のように既発表論文¹⁾では主にGHと周辺環境との関係性について分析を実施した。

本稿では、千葉県内の地域包括支援センターにおいて分類される9地域に立地するGHを比較・検討し、各々の特性を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

2-1. 調査対象地域（図-1）

調査対象地域の千葉県では、平成18年4月、介護保険制度が改正となり各市町村で地域包括支援センターが設置された。地域包括センター^{注2)}とは地域住民の心身の健康の維持、生活の安定、保険・福祉・医療の向上と増進のため必要な援助、支援を包括的に担う地域の中核機関であり、千葉県では9つの地域に分けられる。

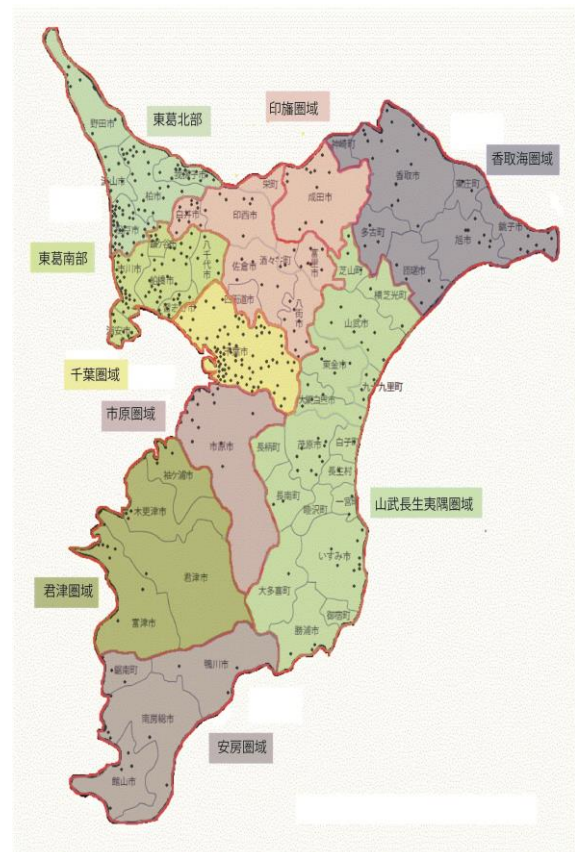


図-1 研究対象GH（地域包括センター別）

Study on Group Homes for Elderly People with Dementia(Part9)

－ As the target Chiba Prefecture group home －

Kenta ISHII and Umekazu KAWAGISI

2-2. 調査方法

千葉県より指定認知症対応型共同生活介護の認証を受けたGH463事例に対して、責任者にアンケート・ヒアリング調査を実施した。

アンケート項目は、建築行為・住環境評価・周辺環境評価・利用状況・運営・介護保険制度について・行政に望むこと・属性・コミュニケーションについて・必要とされる施設等で構成されている。調査対象であるGH毎に責任者（1人）を対象として実施している。

尚、有効回答が得られたGHは463事例中、240事例である。（調査時期：平成25年～27年4月～8月）である。（表-1）

表-1 調査対象GH一覧
（地域包括センター別）

圏域	千葉	市原	東葛南部	東葛北部	印旛	香取海匠	武長生夷	安房	君津	合計
事例数	63	4	55	41	21	17	25	6	8	240

また、満足度に関する評価・分析方法については以下の通りである。

調査対象GHに対し、住環境・周辺環境についてのアンケート調査を行った。評価方法に関しては、住環境・周辺環境に関する満足度を5段階評価方法（「満足」を5点とし、「やや満足」を4点、「普通」を3点、「やや不満」を2点、「不満」を1点とした）により得点化し、地域包括支援センターの地域別に平均得点を算出したものを評価得点とした。

4. 住環境評価（図-2）

GHにおいて、住環境は利用者同士や利用者とスタッフなどの様々なコミュニケーションがとられる場所であり、認知症高齢者が多くの時間を過ごす空間といえる。そのため住環境の質がGHの質に大きく関与していると考えられる。

住環境評価について以下に整理する。

「住環境全体」に関して、「君津圏域」の3.88が最も高く、次いで、「印旛圏域」の3.86が高い値を示している。一方、最も低い値を示して

いるのは「千葉圏域」の2.92、次いで「安房圏域」の3.00である結果を得た。

また、項目によって満足度にばらつきがある地域が多い一方で、「君津圏域」は全項目で3.50以上の評価を得ており、ばらつきが少ない傾向がみられた。

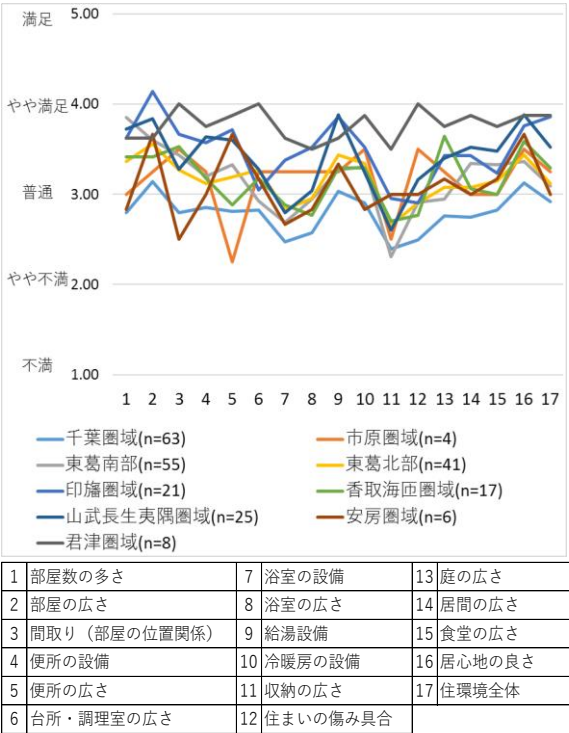


図-2 住環境評価

5. 周辺環境評価（図-3）

GHにおいて、周辺環境はGHの居住者や周辺居住者の関係性を考える上で重要な観点であると考ええる。

周辺環境評価について以下に整理する。

周辺環境評価において、「君津圏域」の「騒音」が4.88と最も高く、次いで「君津圏域」の「自然環境」が4.50と高い。「市原圏内」の「グループホーム付近の交通の便」、「娯楽施設」「スポーツ施設」、「ボランティア施設」、が1.75と最も低く、次いで、「安房圏域」の「娯楽施設」「スポーツ施設」「ボランティア施設」が1.83と低い。

また、「騒音」に関して、「君津圏域」の4.88、「安房圏域」の2.67、「周辺地域の安全性」に関して、「印旛圏域」の3.52、「千葉圏域」の2.68など評価得点差はあるが、それ以外の項目に関しては地域毎に類似傾向がみられた。

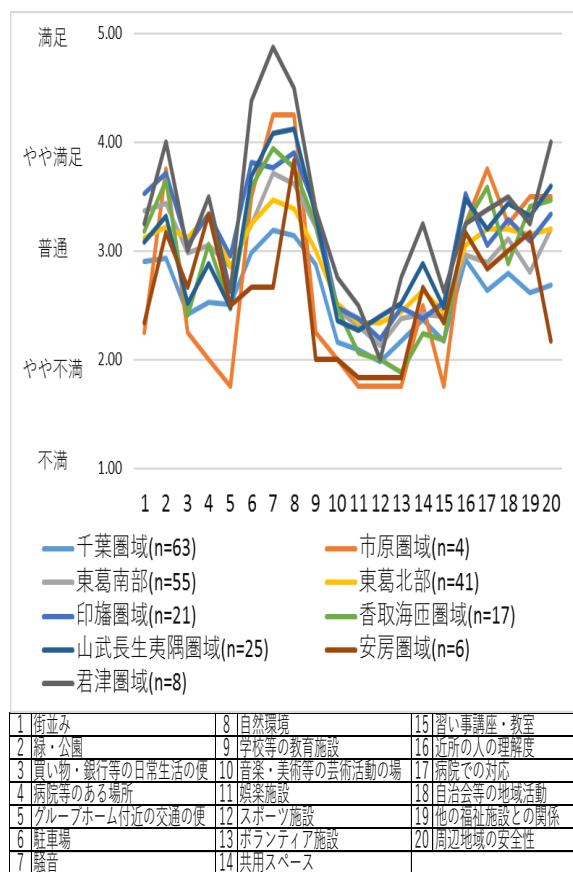


図-3 周辺環境評価

6. 必要とされる施設評価（図-4）

必要とされる施設評価において、「公園」に関して「君津圏域」の9.10%を除き、各地域で10%以上である。同様に、「高齢者が集まれる場所」に関して、「安房圏域」の8.8%を除き、各地域で10%以上の割合を占めると共に「様々な人々と交流できる場所」に関しても「安房圏域」の8.8%を除き、10%以上の割合を占めている。以上の空間が周辺居住者との交流を必要な施設として認識がされていると言えよう。一方、「博物館・美術館」に関して、「香取海匠圏域」及び「安房圏域」を除き、5%未満であり、「公民館」は「東葛南部圏域」及び「安房圏域」を除き、5%未満であった。

また購買機能として、「コンビニ」は「千葉圏域」、「東葛北部圏域」、「印旛圏域」を除き、5%未満であった。

「医療機関」は「市原圏域」で12.5%最も高く、「香取海匠圏域」で8.8%最も低いが平均してどの圏域も必要と考える傾向がみられた。このことから認知症高齢者のGHは医療機関との連携が重要だと考える。



図-4 必要とされる施設評価（複数回答）

7. コミュニケーション評価（図-5）

地域住人とのコミュニケーション評価において、「君津圏域」の「優しく見守られている」が3.75と最も高く、次いで、「君津圏域」の「いい関係が保てている」が3.63と高い値を示している。「全体評価」に関して、「君津圏域」の3.17が最も高く、次いで、「山武長生夷隅圏域」の3.08と高い値を示している。一方、「市原圏域」の「趣味を一緒にする」が1.25と最も低く、次いで「安房圏域」の「趣味を一緒にする」が1.50と低い値を示している。「全体評価」に関して、「千葉圏域」が2.37と最も低く、次いで「安房圏域」が2.46と低い値を示している。地域別で比較すると類似性がみられると共に、「全体評価」では全ての地域で「やや不満」の傾向がみられ、特に「行き来する」、「趣味を一緒にする」、「おすそ分けをする」など、GH内で行われる活動に対しては、「やや不満」傾向にみられた。更に、「優しく見守られている」「いい関係が保てている」などのソフト面の問題はどの圏域でも「普通」傾向にみられた。

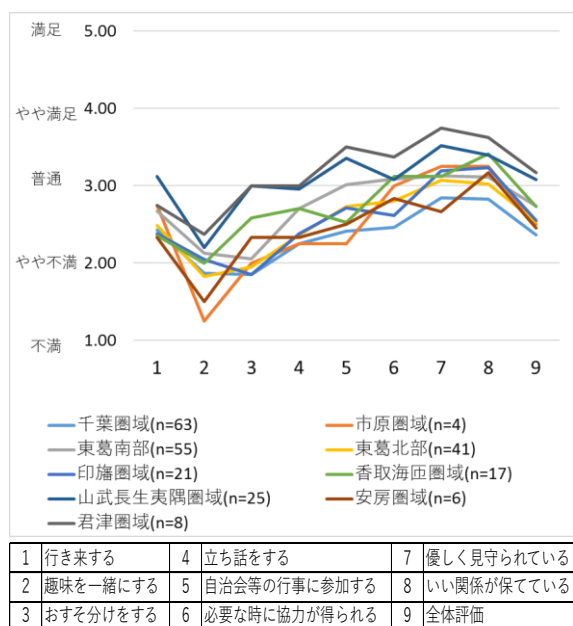


図-5 コミュニケーション評価

8. 周辺居住者の理解度評価（図-6）

周辺居住者の理解度評価において、「君津圏域」の「もっと理解してほしい」が38.5%と最も高く、次いで、「市原圏域」の「時々遊びにきてほしい」37.5%高い割合を占めている。「地域住民と交わる機会がほしい」に関して、「安房地域」と「君津圏域」を除き、各圏域で15%以上であった。また、「時々遊びにきてほしい」に関して「君津圏域」を除き、各圏域で15%以上であり、周辺居住者は交流を求めている傾向がみられた。

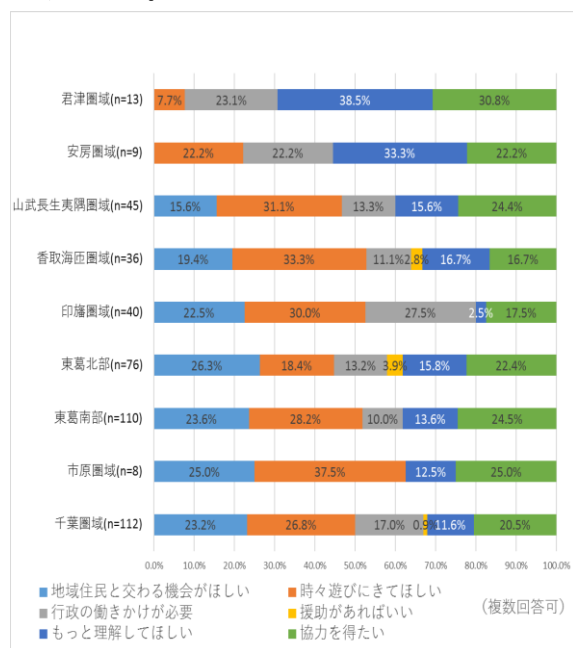


図-6 周辺住人の理解度評価（複数回答）

9. まとめ

千葉県内のGHを対象として、GHの住環境・周辺環境・必要とされる施設・周辺居住者とのコミュニケーション・周辺居住者の理解度に視座を置き、地域包括支援センター別に比較・分析し、以下の知見が得られた。

- ① 住環境評価において、全体では「君津圏域」が最も高い満足度を示しており、「千葉圏域」が最も低い満足度を示している。
- ② 周辺環境評価において、項目別に比較すると「君津圏域」の「騒音」が最も高い満足度を示しており、「市原圏内」の「グループホーム付近の交通の便」、「娯楽施設」「スポーツ施設」、「ボランティア施設」が最も低い満足度を示している。
- ③ 必要とされている施設において、「公園」「高齢者が集まれる場所」「様々な人々と交流できる場所」は全ての地域において約10%から10%以上の割合を占めている。
- ④ コミュニケーション評価において、全体では「君津圏域」が最も高い満足度を示しており、「千葉圏域」が最も低い満足度を示している。
- ⑤ 周辺居住者の理解度において、「君津圏域」の「もっと理解してほしい」が最も高い割合を占めている。

「注釈」

注1) 厚生労働省研究班推計：平成24年

注2) 千葉県庁健康福祉部高齢者福祉課地域包括ケア推進班：平成27年4月13日

「参考文献」

- 1) 嶋山邦夫・山井和則著「グループホーム入門」、リヨン社(1999)
- 2) 「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」厚生労働省、pp. 1-9、2015. 4

「本論文に関連する既発表論文」

- I) 川岸梅和、山根恭介、小泉真規：「認知症高齢者のグループホームにおけるLDK空間の構成に関する研究—千葉県内のグループホームにおけるケーススタディ—その2」日本建築学会計画論文集 第617号、pp. 87-93、2007. 7
- II) 川岸梅和、染谷佐登子、梅木千恵子：「痴呆症高齢者のグループホームと周辺環境の関係性に関する研究—千葉県内のグループホームにおけるケーススタディ—」日本建築学会計画系論文集 第580号、pp. 141-147、2004. 6
- III) 川岸梅和、小泉真規：「認知症高齢者のグループホームに関する研究、その10」日本建築学会大会学術講演梗概集、pp. 969-970、2006. 9
- IV) 川岸梅和、小泉真規「認知症高齢者のグループホームに関する研究（その8）」日本大学生産工学部第39回学術講演会講演概要、2006. 12
- V) 川岸梅和、石井健太「認知症高齢者のグループホームに関する研究（その11）」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）pp. 57-58、2015. 9